

競争的研究資金について

現在の日本の審査制度に欠けているのは

- ・ 審査員の多様性
- ・ 利害関係者の排除
- ・ マスキング評価
- ・ 人材育成や、インフラ整備の長期的視点
- ・ 効率的な資源配分

の5点です。

審査員の多様性と利害関係者の排除については、別資料で詳述しております。

マスキング評価とは申請者の氏名や経歴をマスクして、純粹に研究内容の適切さだけを評価することです。イタリアの科学研究費の審査制度では、すでに実行されています。また、日本でも総務省の一部の審査で取り入れられています。現状の審査では、氏名や学歴が記されているために、恣意的に審査員の関係者に良い点数を与えることが可能です。

人材育成や、インフラ整備の視点がないことは、米国に比べて大きく施策上の戦略性の遅れを招いています。すでに世界の一線級の研究大学としての能力を擁している主要国立大よりも、それに続く大学の強化が、国際競争力の視点からも、資源配分の効率化の視点からも重要です。

昨今、問題になっている研究費の集中については、複数の省の審査員がどれも同じ人々やグループで構成されていることが問題です。複数の制度の審査員になれないようにすることが大事です。インナーサークルの構成を阻止する必要があります。また、省庁を越えた研究費のデータベースの構築も急ぐ必要があります。

その他

評価について

業績での評価は既存の研究分野や既得権益の大きい研究者を保護するので、望ましくないと思います。それに、業績重視では、新しい研究提案を行うとき、過去の当該分野での業績は当然ゼロとなりますが、だから申請が通らないというのでは新しい研究は生まれなくなります。研究費の申請に対する評価の主なポイントは、研究計画の優秀性を主点とすべきだと考えられます。

研究費の審査ではなくて、何らかの理由で個人の業績を評価する必要が生じるとき（事後評価など）は、インパクトファクターの取り扱いを注意する必要があります。なぜならインパクトファクターは分野によって大きく異なるからです。一般に

生命・医学系 > 化学 > 物理（実験） > 物理（理論）

となり、その差は大きく異なります。一例として、物理・応用物理学分野では

ネイチャー、サイエンス	~ 30
フィジカルレビューレターズ	~ 8
アプライドフィジックスレターズ	~ 4
ジャパニーズジャーナルオブアプライドフィジクス	~ 1

となっています。これを見ると、ネイチャー、サイエンスがとび抜けて良いように見えますが、ひとつトリックがあります。というのは、ネイチャーの掲載論文の7割は生命系なのです。ネイチャーに掲載された物理系論文のインパクトファクターは30もの高い値ではありません。したがって、もしインパクトファクターを入れるのであればそのジャーナルの平均値ではなく、その個々の論文の被引用数を正確にカウントする必要があります。

また、被引用数が多いということは、人気があるということですが、人気があることと価値が高いことは必ずしも一致しません。また、科学の世界では時代に先駆けた研究がすぐに受け入れられないことがあります。その場合の被引用数は少なくなります。インパクトファクターを重視すると、そういう研究が無視されることとなります。

また、近年、インパクトファクター重視のために、日本のジャーナルの地位が低下しています。日本の知的財産権保護の観点からは望ましくない傾向です。インパクトファクターはあくまでも副次的な指標に止めるべきだと思います。また、ISI一社に頼って良いのかという問題も生じます。